

平安京右京三条一坊四町跡

2005年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

平安京右京三条一坊四町跡

2005年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生きています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来1200年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じて広く公開することで市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用をはかっていきたいと願っています。

研究所では、平成13年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平方メートルから、数千平方メートルにおよぶ大規模調査までありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたび立命館大学法科大学院新築工事に伴う平安京跡の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げます次第です。

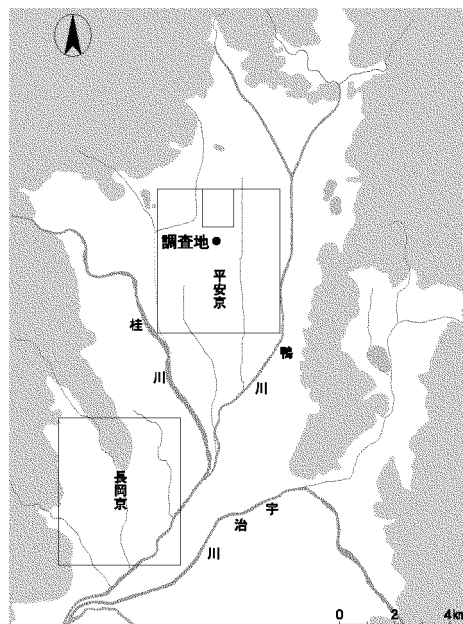
平成17年3月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 平安京右京三条一坊四町跡
- 2 調査所在地 京都市中京区西ノ京梅尾町
- 3 委 託 者 学校法人 立命館
- 4 調査期間 2004年7月27日～2004年12月28日
- 5 調査面積 3,791m²
- 6 調査担当者 網 伸也・山口 眞
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「壬生」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 日本測地系（改正前）平面直角座標系（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用基準点 京都市が設置した京都市遺跡発掘調査基準点（一級基準点）を使用した。
- 11 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 12 遺 構 番 号 建物には通し番号を付し、他の遺構は調査時の番号を使用し遺構種類を前に付けた。
- 13 遺 物 番 号 挿図の順に通し番号を付した。
- 14 掲 載 写 真 村井伸也・幸明綾子
- 15 遺 物 復 元 村上 勉・出水みゆき
- 16 基準点測量 宮原健吾
- 17 本書作成 網 伸也・山口 眞
- 18 編集・調整 児玉光世・大立目 一

（調査地点図）



目 次

1 . 調査経過	1
2 . 位置と環境	2
3 . 遺 構	8
(1) 平安時代前期から後期の遺構	8
(2) 平安時代末期から鎌倉時代の遺構	9
(3) 江戸時代から明治時代の遺構	12
4 . 遺 物	13
(1) 瓦 類	14
(2) 土器類	15
1) 平安時代前期の土器	15
2) 平安時代後期の土器	17
3) 平安時代末期から鎌倉時代の土器	18
4) 明治時代の土器	20
(3) 金属製品	21
(4) 土製品	22
(5) 木製品	22
5 . ま と め	23

図 版 目 次

図版 1	遺構	1 調査区全景（北から）
		2 調査区全景（南から）
図版 2	遺構	1 棟門SB 2（北東から）
		2 SX307（北東から）
		3 SD 9（東から）
図版 3	遺構	1 SX308（北から）
		2 SD100・SD337（北から）
図版 4	遺構	1 西高瀬川舟入りSD70（北西から）
		2 西高瀬川舟入りSD70断面（北から）
図版 5	遺構	1 西高瀬川舟入りSD70石垣（南西から）
		2 西高瀬川舟入りSD70接岸遺構（西から）

- 図版 6 遺物 軒瓦・刻印瓦
 図版 7 遺物 土師器・瓦器
 図版 8 遺物 輸入陶磁器・国産陶磁器

挿 図 目 次

図 1	調査位置図 (1 : 2,500)	1
図 2	調査前全景 (北東から)	2
図 3	調査風景	2
図 4	周辺の調査 (1 : 1,000)	3
図 5	遺構実測図 (1 : 500)	5
図 6 - 1	南壁断面図 (1 : 100)	6
図 6 - 2	南壁土層名	7
図 7	棟門SB 2 実測図 (1 : 50)	9
図 8	SX308実測図 (1 : 200)	10
図 9	拡張区南壁断面図 (1 : 100)	11
図 10	西高瀬川舟入りSD70東岸護岸石垣実測図 (1 : 100)	12
図 11	軒瓦拓影・実測図、刻印瓦拓影 (1 : 4)	14
図 12	SB 1 ・ SD120 ・ SX307出土土器実測図 (1 : 4)	15
図 13	SD 9 出土土器実測図 (1 : 4)	17
図 14	SD337出土土器実測図 (1 : 4)	17
図 15	SD100出土土器実測図 (1 : 4)	18
図 16	SD221出土土器実測図 (1 : 4)	19
図 17	SD 7 ・ SD70出土土器実測図 (1 : 4)	20
図 18	銭貨拓影 (1 : 2)	21
図 19	土錘実測図 (1 : 2)	22
図 20	SD70出土下駄実測図 (1 : 4)	22

表 目 次

表 1	遺構概要表	8
表 2	遺物概要表	13

平安京右京三条一坊四町跡

1. 調査経過

今回の発掘調査は、立命館大学法科大学院（仮称）新築工事に先だって実施した。調査地は平安京右京三条一坊四町にあたり、藤原良相邸である「西三条第」の有力な候補地となっている。「西三条第」は名木が咲き乱れた華麗な邸宅であったことが伝えられており、右大臣良相邸であることから大規模貴族邸宅であったことが充分予測できるが、直接「西三条第」に関わる遺構はまだ確認できていないのが現状である。今回の調査区では町の東部および朱雀大路を広範囲に調査することから、条坊遺構を検出するとともに「西三条第」に関する遺構の確認を目的として発掘調査を行った。

調査区は当初南北約90m、東西約40mの調査区を設定し、平成16年8月17日より重機掘削を開始した。遺構面は予測した以上に近世以降の削平を受けており遺存状況はあまり良くなかったが、当初の予定通り朱雀大路の西側溝と姉小路の南側溝を検出した。宅地内（右京三条一坊四町）で

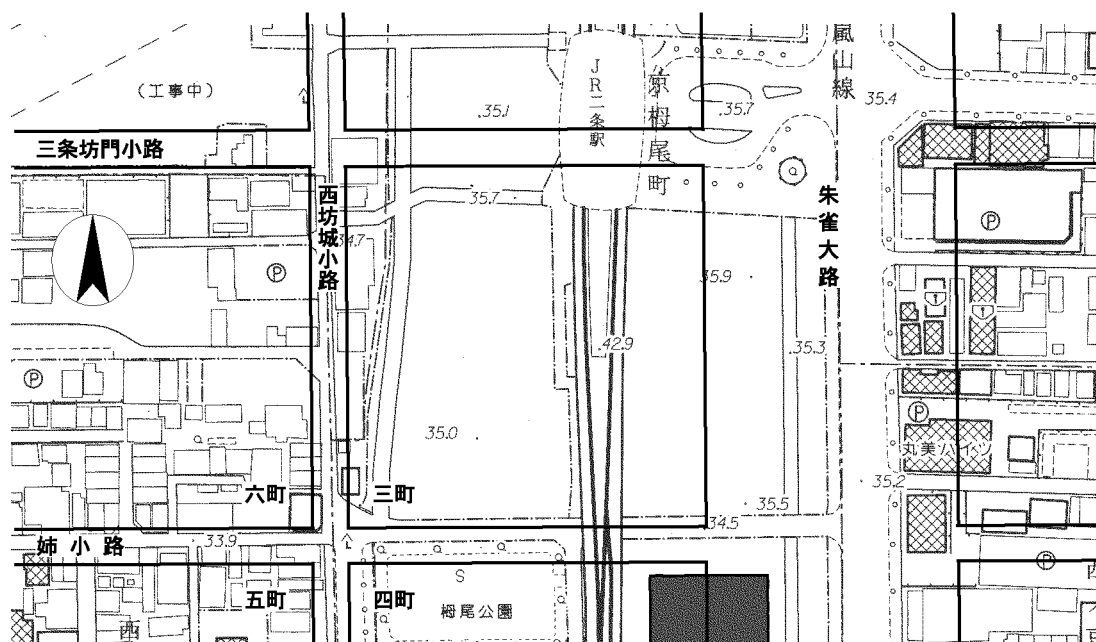


図1 調査位置図 (1 : 2,500)



図2 調査前全景（北東から）



図3 調査風景

は近世以降と考えられる耕作溝を多く確認しており、同一面で平安時代の建物柱穴と池状石敷き遺構を検出したが削平が激しく、ほとんど遺存していない状況であった。また、近代の遺構としては調査区東半部で明治時代の舟入り遺構を検出し、東壁南端部では同時期の石垣も発見している。これらの遺構の精査を行うとともに記録実測を行い、平成16年11月11日にはクレーンによる高所からの写真撮影を実施した。

さらに、調査区南西隅部で全面に石を敷き詰めた落ち込み遺構の東肩部を確認し、平安時代の園池遺構の可能性があるため、平成16年11月16日より重機にて幅約10mで南へ約22m拡張を行なった。その結果、幅約5mで南北に細長い石敷き遺構を確認した。この新たに検出した遺構についても、平成16年12月10日に写真測量および全景写真を撮影し、平成16年12月14日には敷地南端で東西トレンチを開け、さらに南へ石敷きが延長することを確認した。発掘調査は平成16年12月28日にすべての作業を終了し、最終的に調査面積は約3,791m²となった。

2 . 位置と環境

調査地はJR二条駅の南東に位置しており、現状では平坦な地形となっている。これは近現代の鉄道敷設に伴い二条駅周辺の広範囲において大規模な整地が行われた結果であり、整地が行われる前は南西に向かって緩やかに傾斜していたと考えられる。実際に調査地北側で実施した発掘調査では、整地土層下において旧耕土層と遺構面である基盤層（砂礫層）を検出しており、これらの耕作面が階段状に南西に下がっていく地勢を呈していたことが判明している¹⁾。当調査地においても後述するように南西に下がる基盤層上で遺構を確認しており、旧地形も同様であったことが推測できる。

平安京右京三条一坊四町における過去の調査は、平成4年度に当調査地敷地内を試掘調査しており、東西に並ぶ新旧2時期の朱雀大路西側溝と姉小路南側溝を検出している²⁾。朱雀大路西側溝は西側のものが新しく12世紀代に埋没したとの所見を得ており、今回の調査成果とも矛盾がない。平成5年度には町西半域にあたるJR嵯峨野線の西側で発掘調査と試掘調査を行い、平安時代中期に遡る園池状遺構と掘立柱建物を発見するとともに、西坊城小路東築地に関係する南北溝を検出

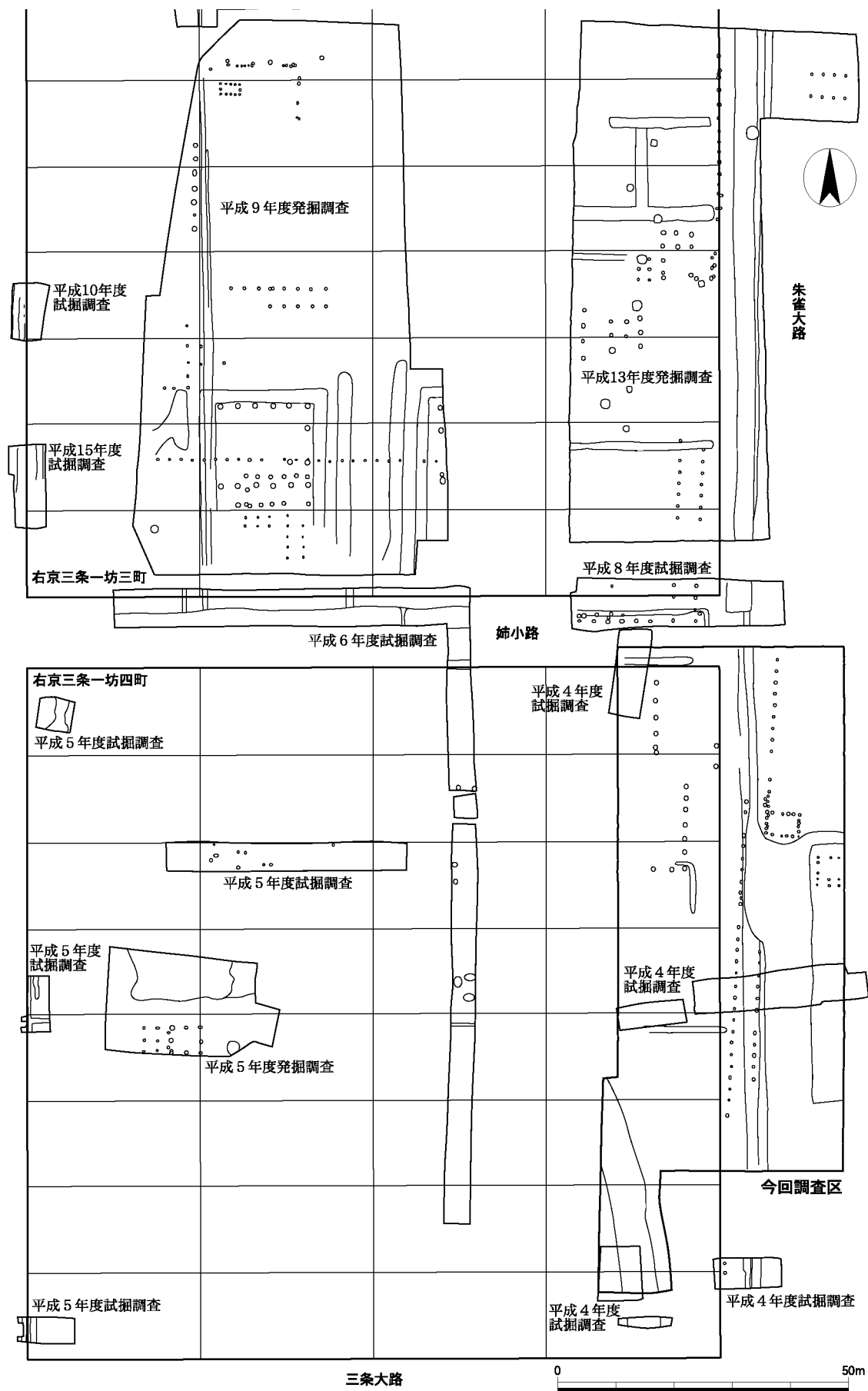


図4 周辺の調査 (1 : 1,000)

した。³⁾西坊城小路関係の南北溝は朱雀大路西側溝と同様に新旧2時期あり、新段階のものは埋没が中世まで下がるようである。また、平成6年に実施した発掘調査では、鎌倉時代に埋没した姉小路南側溝と四町内で平安時代の柱穴や土壌群を確認している。⁴⁾姉小路南側溝は平成4年度の試掘調査では平安時代中期の遺物が主体であったことから、姉小路も新旧2時期の溝が同一場所に掘削されていた可能性がある。

このように、当調査地周辺は遺構の遺存状況はあまりよくないが、朱雀大路西側溝・姉小路南側溝・西坊城小路東側溝と新旧2時期の条坊遺構を確認しており、少ないながらも平安時代中期の遺構も宅地内で検出している。これら平安時代中期の遺構との関係で注目できるのが、『拾芥抄』の記載から想定される藤原良相邸「西三条第」の位置である。『拾芥抄』には「三条北朱雀西、良相大臣家」とあるが、巻末「西京図」には姉小路北、西坊城小路西の六町を「西三条第」としており史料の混乱が生じているが、最近の研究では四町を中心とする地域が有力とされている。⁵⁾ただ、発掘調査では六町でも平安時代前期に遡る大型建物とともに洲浜を伴う広大な庭園遺構を検出しており、園池内からは「齋衡四年三條」「正倉帳」と書かれた題箋木簡が出土している。⁶⁾四町は朱雀大路と三条大路に面した京内でも一等地であり「西三条第」の立地としては申し分ないが、考古学的には立証できないのが現状といえる。

また、条坊新段階の溝がすべて平安時代末期から鎌倉時代初頭のものであることから、同時期に当地域周辺が再整備されたことをも示している。しかし、中世以降は宅地として利用された状況は認められず、近現代まで連綿と耕作地であった。宝暦8年(1758)12月に千本通三条上ル西側の畑地を借りて茶店が建ち通行人に焼き餅を商った記録が残るように、当地域は江戸時代には畑地として利用されていたことがわかる。その後、幕末から明治の初頭にかけて西高瀬川が掘削整備されることによって、千本三条は丹波・嵯峨野と直結した京の材木流通基点として位置づけられ、材木商人が多く店を構え材木町を形成していったのである。⁷⁾

註

- 1) 平尾政幸・山口 真『平安京右京三条一坊三町(右京職)跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2001-3 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2002年
- 2) 本 弥八郎「平安京右京三条一坊」『平成4年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- 3) 伊藤 潔「平安京右京三条一坊2・7」『平成5年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 4) 吉村正親「平安京右京三条一坊」『平成6年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 5) 栗原 弘「西三条第に於ける居住形態について」『文化史学』第46号 1990年
- 6) 本 弥八郎・平尾政幸・山口 真『平安京右京三条一坊三・六・七町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2002-5 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2002年
- 7) 藤田叔民「近郊の発展」『京都の歴史8』古都の近代 学芸書林 1975年

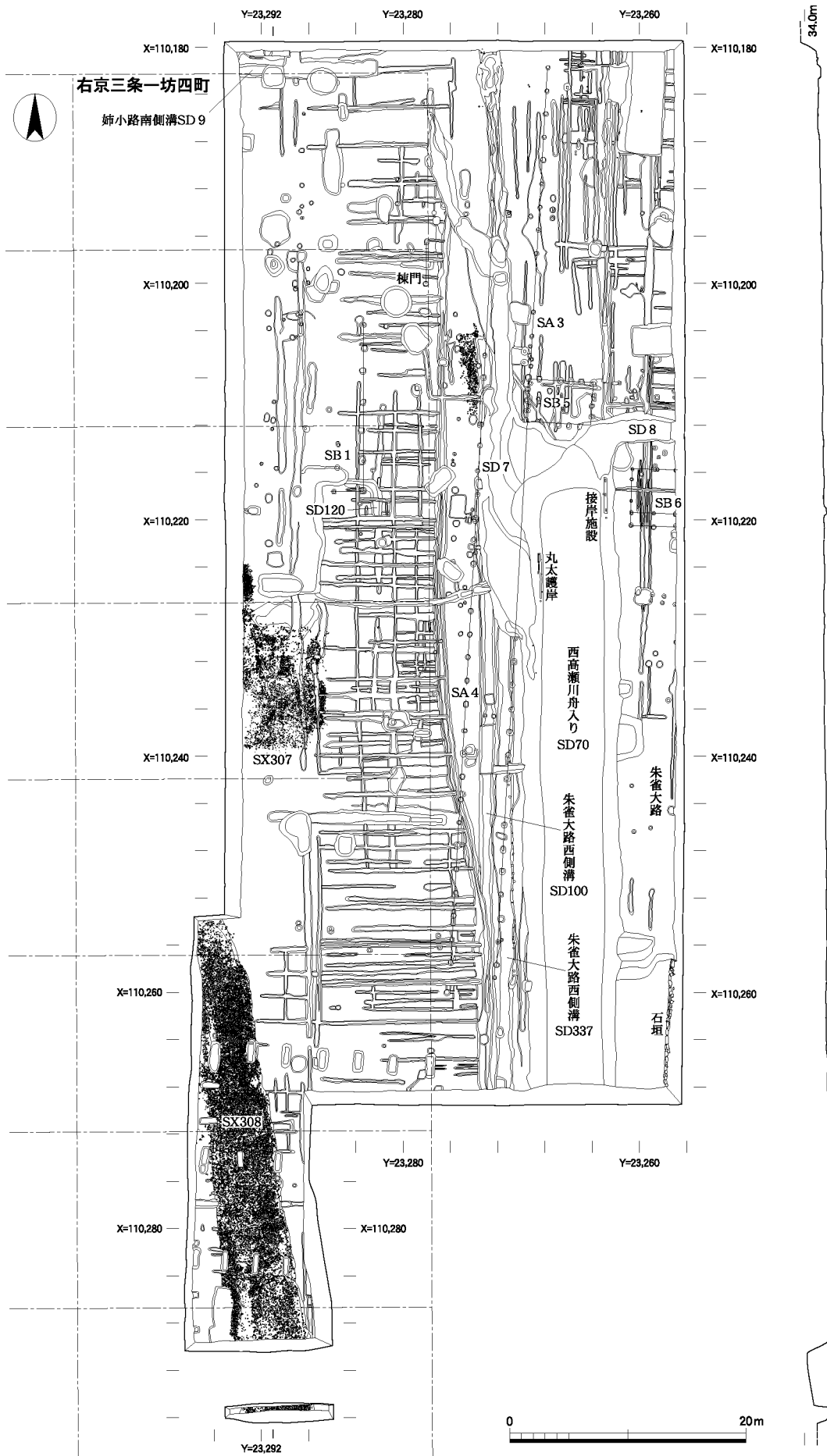


図5 遺構実測図(1:500)

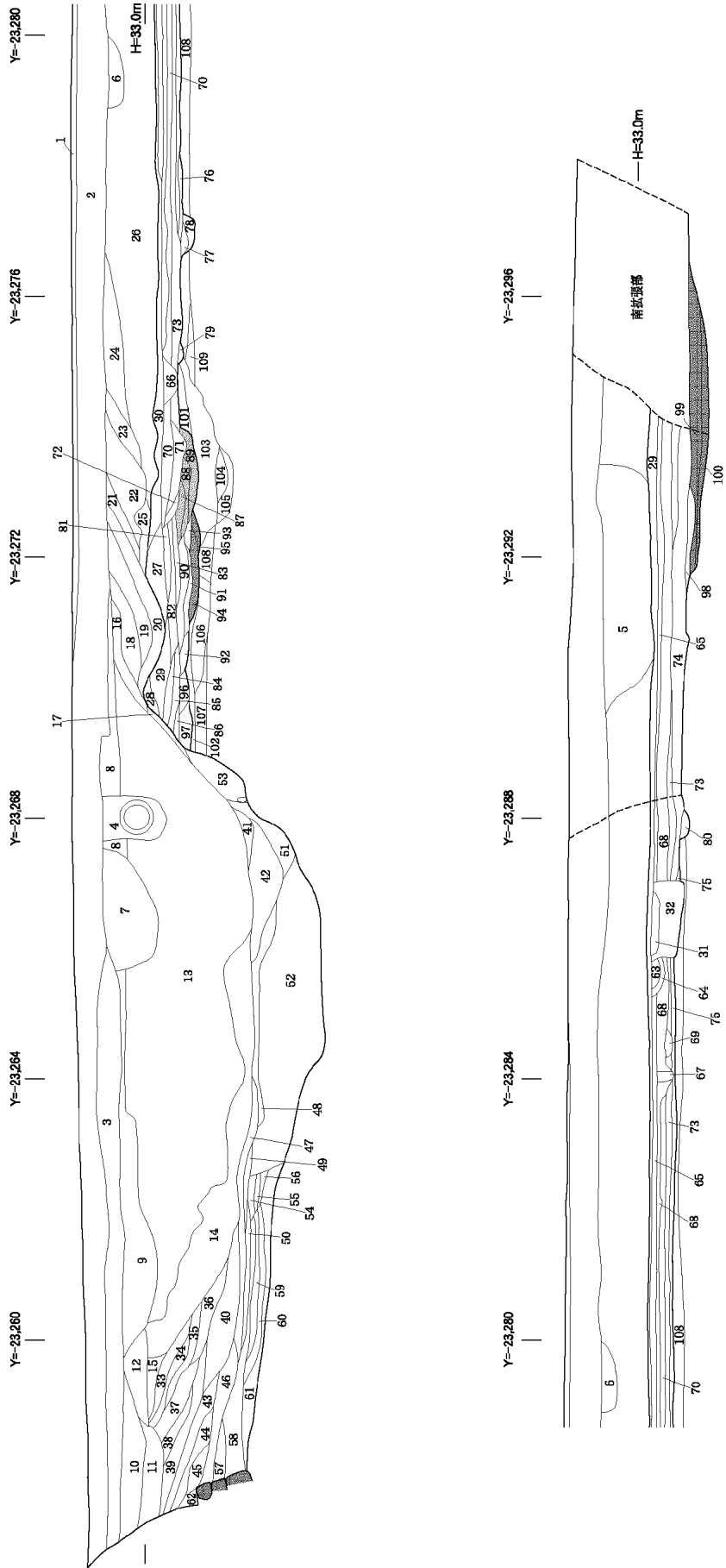


图 6-1 砌体断面图 (1 : 100)

1	整地 碎石	41	2.5Y2/1 黒色粘土	81	2.5Y3/2 黒褐色砂泥
2	盛土 2.5Y5/2 黒褐色砂泥 礫混	42	5YR5/8 明赤褐色砂礫	82	2.5Y4/2 暗灰黄色泥砂 礫多量に含む
3	盛土 2.5Y3/1 黒褐色粗砂	43	2.5Y3/2 黒褐色砂泥	83	2.5Y3/2 黒褐色砂泥 やや粘質
4	下水管掘形 2.5Y4/3 オリーブ褐色泥砂	44	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥	84	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥
5	現代擾乱 コンクリート片・空き缶等を含む	45	2.5Y3/2 黒褐色砂泥 やや粘質	85	2.5Y4/2 暗灰黄色泥砂
6	2.5Y2/1 黒褐色砂泥 炭多量に含む コンクリート含む	46	10YR3/1 黒褐色砂泥	86	2.5Y4/2 暗灰黄色泥砂 礫混
7	2.5Y3/1 黒褐色砂泥	47	10YR2/1 黒色砂泥	87	10YR3/2 黒褐色砂泥 粘質 礫混 SD100
8	2.5Y2/1 黒色炭	48	7.5Y2/1 黒色砂泥 粘質	88	2.5Y4/2 暗灰黄色泥砂 瓦含む SD100
9	2.5Y3/2 黒褐色砂泥 コンクリート片含む	49	2.5Y3/1 黒褐色粘土	89	5Y4/1 灰色粘土 細砂混 SD100
10	10YR6/6 明黄褐色砂泥	50	2.5Y2/1 黒色粘土	90	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色泥砂 瓦・礫多量に含む
11	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥	51	2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 粘質	91	2.5Y4/4 オリーブ褐色粗砂 瓦・礫含む
12	10YR4/3 におい黄褐色砂泥	52	2.5Y5/3 黄褐色砂礫 最下層に明治時代の陶磁器が放棄される	92	2.5Y4/3 オリーブ褐色泥砂 瓦・礫含む
13	西高瀬川用入り埋め立て 黄褐色山砂・褐色泥砂・細砂を呈する	53	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥	93	10YR5/6 黄褐色砂泥
14	2.5Y5/3 黄褐色泥砂	54	2.5Y3/1 黒褐色砂泥 小礫混	94	10YR2/2 黒褐色粘土 小礫混 SD337
15	10YR4/6 褐色泥砂	55	5Y3/1 オリーブ黒色砂泥 粘質	95	10YR2/2 黒褐色粘土 SD337
16	2.5Y4/3 オリーブ褐色泥砂	56	2.5Y3/1 黒褐色砂泥 粘質 礫混	96	2.5Y4/2 暗灰黄色細砂
17	2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥	57	10YR2/2 黒褐色砂泥 やや粘質	97	10YR4/2 灰黄褐色砂泥 粘質 礫混
18	10YR4/6 褐色泥砂	58	10YR2/1 黒色砂泥 粘質	98	10YR4/1 褐灰色砂泥 小礫混 中世遺物含む
19	10YR5/6 黄褐色泥砂	59	10Y4/1 灰色砂泥 粘質	99	2.5Y3/2 黒褐色粘質土 SX308
20	5YR7/3 浅黄色微砂	60	10G5/1 緑灰色泥砂	100	5Y4/1 灰色粘土 SX308
21	2.5Y4/6 オリーブ褐色泥砂	61	5Y2/1 オリーブ黒色粘土	101	2.5GY6/1 オリーブ灰色粘土 (以下地山)
22	10YR4/4 褐色泥砂	62	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥 礫多く含む	102	2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 瓦含む
23	2.5Y4/3 オリーブ褐色泥砂	63	N2/2 黒色炭層 粗砂混	103	2.5GY5/1・10YR6/8 明黄褐色微砂 旧流路
24	2.5Y4/4 オリーブ褐色泥砂	64	5Y3/1 オリーブ黒色砂泥 粘質 黄褐色砂泥混	104	5Y4/1 灰色粘土 炭化木含む 旧流路
25	10YR4/4 褐色泥砂	65	2.5Y5/6 黄褐色砂泥	105	103と同色粘土 旧流路
26	10YR4/6 褐色泥砂 2.5Y5/4 黄褐色砂泥混	66	5Y3/1 オリーブ黒色砂泥 炭混	106	7.5Y5/1 灰色粘土
27	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥	67	2.5Y6/6 明黄褐色泥砂 炭混	107	7.5YR5/8 明褐色砂礫
28	10YR5/6 黄褐色泥砂	68	5Y3/1 オリーブ黒色砂泥 粘質強い	108	5Y5/2 灰オリーブ砂泥 小礫混
29	2.5Y3/2 黒褐色砂泥 礫混	69	7.5Y4/1 灰色砂泥 粘質 黄色粘土混	109	2.5Y5/4 黄褐色砂礫
30	N2/2 黒色炭	70	5Y3/1 オリーブ黒色粘質土		
31	N1.5/0 黒色炭層	71	2.5Y3/2 黒褐色砂泥 やや粘質		
32	5YR4/4 におい赤褐色鉄と炭の混じり	72	2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥		
33	2.5Y3/3 暗オリーブ灰色泥砂	73	5Y5/2 灰オリーブ色砂		
34	2.5Y4/3 オリーブ褐色泥砂	74	2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥		
35	2.5Y4/4 オリーブ褐色泥砂	75	5Y5/2 灰オリーブ色砂 細砂礫多く含む		
36	2.5Y4/4 オリーブ褐色泥砂・細砂	76	2.5Y4/2 暗灰黄色粗砂		
37	2.5Y4/2 暗灰黄色泥	77	2.5Y4/3 オリーブ褐色粗砂		
38	2.5Y4/3 オリーブ褐色泥砂	78	2.5Y5/3 黄褐色砂礫		
39	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色泥砂	79	2.5Y4/2 暗灰黄色粗砂 近世耕作層		
40	2.5Y4/4 オリーブ褐色砂泥	80	5Y4/1 灰色砂泥		

図 6-2 土層十層図

3. 遺 構

調査区の基本層序は、G.L. - 0.2～0.5mが現代盛土で、その下層に0.8～1.4mの厚さで近代の整地層である黄褐色土が堆積している。この近代整地層は北西から南東に向かって斜め堆積しており、鉄道の開設に伴って二条駅まで運ばれた土砂によって順次埋め立てられた様相を呈している。この整地層の下層はオリーブ黒色粘質土を基本とする厚さ約0.4～0.6mの耕作土層で、この耕作土層を除去すれば基盤層である砂礫層となる。平安時代の遺構と中近世の耕作溝はすべてこの基盤層上で検出しており、近代の遺構群も本来は耕作土層上で検出すべきところであるが、高瀬川舟入りに関連する大規模な遺構であるため同一面で調査を行った。遺構面の標高は、調査区北東部で約33.1mと最も高く、南西に向かって緩やかに傾斜しており、最も低い調査区南西部で標高約32.3mとなっている。

今回検出した主な遺構は、平安時代前期から中期の遺構が掘立柱建物1棟・礫敷き遺構、平安時代後期から鎌倉時代の遺構が門遺構・朱雀大路西側溝・姉小路南側溝・石敷き流路で、江戸時代から明治時代の遺構が西高瀬川舟入り本体と舟入りに流れ込む流路・建物2棟・南北柵列2条・石垣などである。中近世の遺構は耕作小溝群だけであるが、遺構面はこれら耕作地としての土地利用に伴い広範囲に渡る激しい削平を受けていた。このため、包含層が全く残っておらず遺構の遺存も非常に悪い状況であるが、ここでは各時代の遺構についてそれぞれ概要を報告する。

(1) 平安時代前期から後期の遺構

SB1 朱雀大路西築地心の推定ラインから西へ約5.7mの地点で、南北4間分(約10.2m)の掘立柱列を検出した。さらに、南端柱穴から西へ約2.5mの場所でも対応する柱穴底部をかるうじ

表1 遺構概要表

時 代	遺構番号	概 要
平安時代前期	SB1	南北4間×東西1間以上の建物跡
	SD120	SB1南東隅に位置する溝
	SX307	石敷き遺構 園池関連か
平安時代後期	SD337	朱雀大路西側溝 旧段階
平安時代末期～鎌倉時代	SD100	朱雀大路西側溝 新段階
	SB2	棟門
	SD9	姉小路南側溝
鎌倉時代	SD221	東西溝
中世以前	SX308	石敷き流路状遺構
江戸時代	SA3	南北方向柵列
	SA4	南北方向柵列
明治時代	SB5	東西5間×南北4間東西棟建物
	SB6	東西2間以上×南北4間東西棟建物
	SD7	南北流路
	SD8	東西流路
	SD70	西高瀬川舟入り

て検出しており、西へ展開する掘立柱建物と認識している。この場合、柱間は北から9尺・8尺・8尺・9尺とれることから、少なくとも南北に庇をもつ東西棟と想定することもできる。ただ、西側柱穴の大半が耕作時の削平のため残っておらず、この柱穴列の南北にも柱間は不揃いになるが柱穴を確認しており、柵として認識することも可能であり現状では確定することは困難である。柱掘形は0.6～0.8mの隅丸方形を呈し、認識できた柱直径は約0.2mである。

SD120 SB1南端柱穴の北側と東側を取り巻くような溝状遺構。幅約0.8mで深さは約0.1mと浅い。埋土は暗褐色粘土で、9世紀中頃の土師器を包含していた。SB1に伴う何らかの施設と考えられるが、詳細は不明である。

SX307 SB1の南に位置する石敷き遺構である。検出した石敷き範囲は南北約16m、東西約7mで、西は調査区外に展開する。緩やかに西に傾斜し、東の最も高い地点で標高32.5m、西端の最も低い地点で標高32.3mであった。底面には拳大の礫が敷かれており、礫敷き形成層には黒褐色砂泥や暗灰黄色細砂などが互層に堆積していた。遺構本体が調査区西に展開することは明らかで、おそらく園池関係の遺構と想定できる。礫敷き内には瓦や土器など9世紀中頃の遺物を包含している。

(2) 平安時代末期から鎌倉時代の遺構

SB2(図7) 朱雀大路西築地心の想定ライン上で検出した南北に並ぶ柱穴である。削平によって深さ0.1mほどしか残っていなかったが、柱掘形は0.45～0.5mの隅丸方形を呈する。掘形底部に長さ約0.3mの小さな礎板が遺存しており、柱間は約3.6m(12尺)と考えられる。柱痕跡が明瞭でないため正確にはわからないが、掘形の位置関係から北に対して若干東へ振れるようである。柱穴が南北に2箇所しかないことや、朱雀大路西築地心の想定ライン上であるとともに北一行ライン上にも乗ってくることなどから、朱雀大路側に面して設けられた棟門と考えられる。年代を示す遺物を伴わないが、朱雀大路の機能が低下した時期のものであることは明らかで、やや東に振れることを考慮すると平安時代末期の条坊再整備の段階に属すると考えられる。

SD337 調査区中央南半で検出した朱雀大路西側溝の旧段階の溝である。幅1.4～1.7mで、深さは0.15～0.2mしか遺存しない。溝の振れはほぼ真北で、溝心の座標値はY=-23,271.5である。

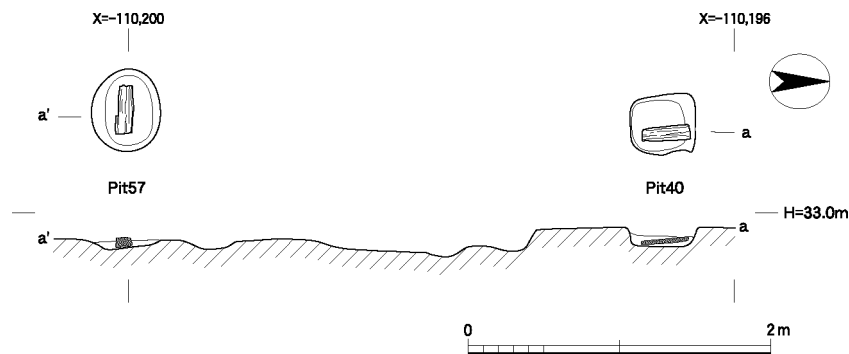


図7 棟門SB2実測図(1:50)

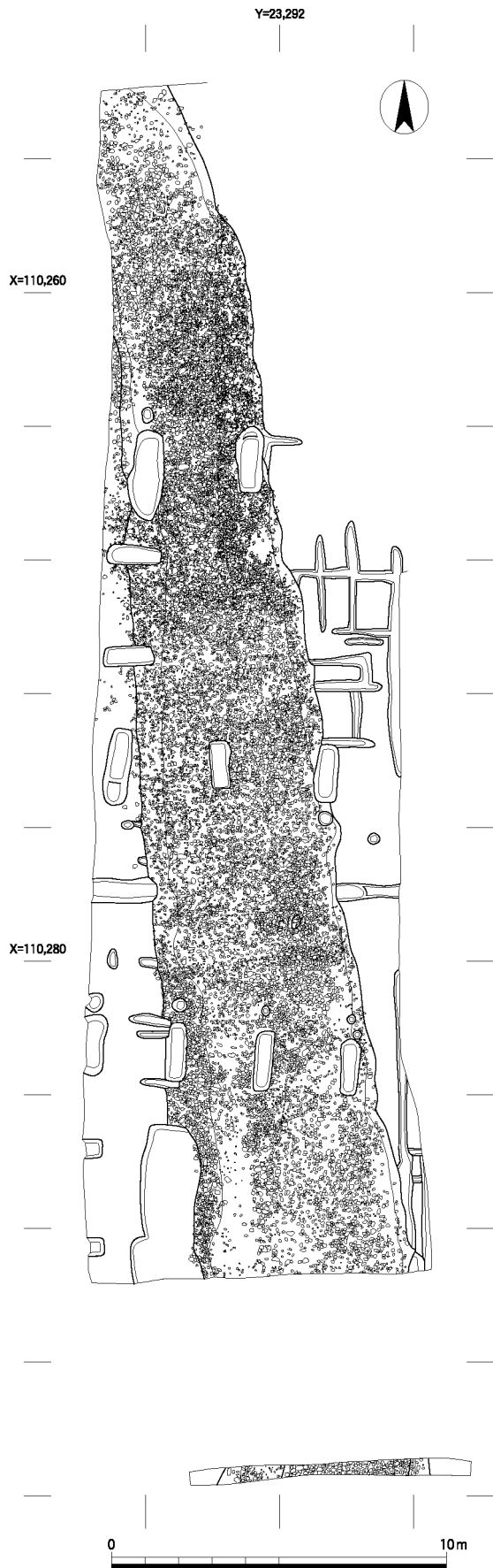


図8 SX308実測図(1:200)

溝底部の標高は北端で32.55m、南端で32.15mで、明らかに北から南へ傾斜する。埋土は下層に黒褐色粘質土、中層にオリーブ褐色粗砂、上層に暗オリーブ褐色泥砂が堆積しており、砂の堆積状況から一時水の流れが豊富であったことがわかる。なお、溝の東肩路面部では瓦を多く包含した補修の整地層が確認でき、ここから11世紀の土器類が多く出土した。SD337はこの路面整地と同時期に機能していた遺構であり、少なくとも溝の終焉は11世紀以降ということになる。

SD100 SD337の西に接して検出した朱雀大路西側溝の新段階の溝である。調査区北半部では近代溝SD1に東半を壊されていたが、西半のみを検出している。幅1.3~1.4mで、深さは0.1~0.2mしか遺存しない。溝の振れは若干東へ振れるようで、両肩が確認できた地点での溝心の座標値は、北側のX=-110,228でY=-23,272.9、南端X=-110,268でY=-23,273.2である。溝底部の標高は調査区北端で32.9m、南端で32.25mで、SD337と同様に北から南へ緩やかに傾斜する。埋土は下層に灰色粘質土、中層に暗灰黄色泥砂、上層に黒褐色砂泥が堆積しており、12世紀の遺物を包含する。なお、溝の西側では溝とほぼ同時期の遺物を包含する暗灰黄色泥砂が薄く盛られており、築地犬行を構成する整地層と考えられる。

SD9 調査区北西端部で検出した東西溝である。近世の耕作溝と重複しているが、幅約1.2m、深さ約0.2mで、12世紀の遺物を包含する黒褐色粘質土が堆積していた。位置的關係から姉小路南側溝と考えられるが、朱雀大路西側溝とは合流せずY=-23,282ラインで途切れている。溝心の座標はX=-110,182、底部標高は西端で32.7m、東端で32.8mとなっており、

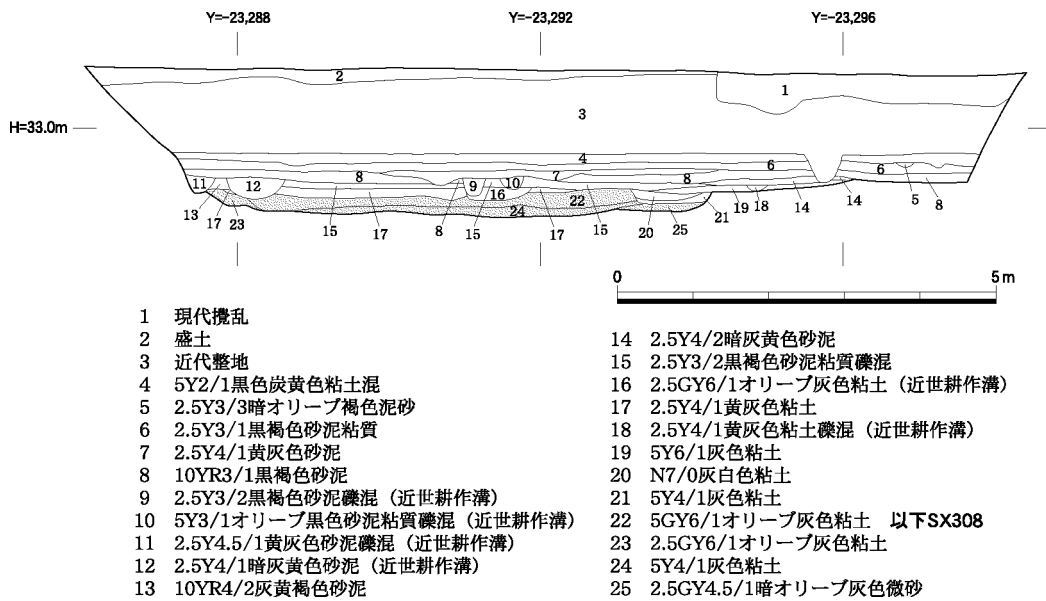


図9 拡張区南壁断面図(1:100)

非常に緩やかではあるが西へ傾斜しているようである。

SD221 幅約1.0~1.2m。深さ0.1~0.4mの東西溝。検出延長12m。東は朱雀大路西側溝の手前で途切れる。西は近世土壌や耕作により攪乱を受ける。同規模、同時期の溝を三町の調査でも検出している。

SX308(図8) 調査区南西の南拡張区で検出した石敷き流路状遺構である。北端は削平が激しく底部の石敷きしか確認できなかったが、南ほど良好に遺存していた。拡張区だけで南北35.5m分確認しており、全体では北に対して西へ振れている。幅は北側の両肩が確認できた地点(X=-110,268ライン)で約5m、南端部(X=-110,289.5ライン)で約6.7mとなっており、南の方が検出幅が広がっている。肩部の立ち上がり之急で、底部から肩部にかけて全面に拳大の石が敷き詰められていたが、南端部では底部西側で石敷きがややまばらな場所が認められた。深さは0.3~0.4mで、西肩部下層に暗オリーブ灰色細砂、下層にやや砂を含む灰色粘質土が薄く堆積しているが、上層はオリーブ灰色粘質土が厚く堆積していた。遺物は植物遺体も含めてほとんど包含していないが、平安時代中期の遺物と中世の遺物が極めて少量ながら出土している。南への展開を調べるためにX=-110,296の地点で試掘調査を行ったところ、やはり6mを越える幅で確認でき、さらに南へ延長する様相を呈していた。底部標高は拡張区北端で32.1m、拡張区南端で31.8m、南試掘トレンチで31.7mと北から南へ緩やかに傾斜している。この遺構の性格であるが、人工的に掘削された遺構であることは石敷きの存在から明らかだが、遺物がほとんど出土しないため時期を確定することが困難である。一つの選択肢として園池に関わる遺構である可能性もあるが、植物遺体など園池特有の遺物が見られず、三条大路北築地心想定ライン(X=-110,301.6)の北側約5.5mの地点まで6m幅で延長してきていることから三条大路まで延びる可能性が高いことなど、平安時代まで遡る園池遺構とするには否定的条件が多いのが実状である。ここでは遺構の判断は保留しておき、今後の調査例の増加をまって再度検討したい。

(3) 江戸時代から明治時代の遺構

SA3 調査区中央で検出した南北柵列である。約73m分検出しており、南はX=-110,254ラインで途切れるが、北側は調査区外に延長する。柱間は約2mであるが部分的に乱れるところもある。北に対して東へ約3°30'振れており、この振れは後述する近世・近代の遺構群と共通する。

SA4 SA3の西約4mの地点で検出した南北柵列である。約54m分検出しており、南はX=-110,260ラインで途切れる。北側は近代溝SD7のところまで途切れており、北に延長していたかどうかは不明である。北に対して東へ約3°30'振れており、柱間も約2mとSA3と共通することから、SA3を付け替えた柵列と考えられる。

SB5 舟入り遺構の北側で検出した東西棟建物である。東西5間(約5.6m)×南北4間(約3.8m)の側柱を確認しているが、柱間是不揃いである。建物の振れはSA3・4と同じである。

SB6 SB5の南東、舟入り遺構の北端東に位置する建物である。東西2間以上(3.8m以上)×南北4間(約4.8m)で東は調査区外に延びる。建物の振れはSA3・4と同じである。SB5とともに舟入りに関連する建物である。

SD7 北から舟入りに流れ込む流路である。幅1.2~1.5mで、深さ約0.5mである。X=-110,198ライン付近で西側の耕作地から排水溝が合流し、舟入り遺構の先端北西に流れ込む。かなりの水量があったようで底部は凹凸が激しく、舟入りとの合流地点も南へ大きく決っている。舟入りが掘削される以前は南北用水として直流していたようで、朱雀大路西側溝であるSD337と重複して上層に江戸時代の南北流路痕跡が認められた。おそらく、舟入りの掘削に伴い農業用水の水を引き込むように改変されたものと考えられる。なお、SD7埋土から京都鉄道株式会社に関わる多量の遺物が出土した。

SD8 東から舟入りに流れ込む流路である。SD7よりも大きく幅2.0~2.5mで、深さ約1mである。西高瀬川から舟入り先端北東に水を引き込むために、新たに付け替えられた川と考えられる。

SD70(図10) 舟入り本体の遺構である。幅約8m、深さ約2.5m、検出した南北長は約54mで、南は調査区外に延びる。護岸に杭を打ち込んで横板材を据え付けており、SD7との合流地点

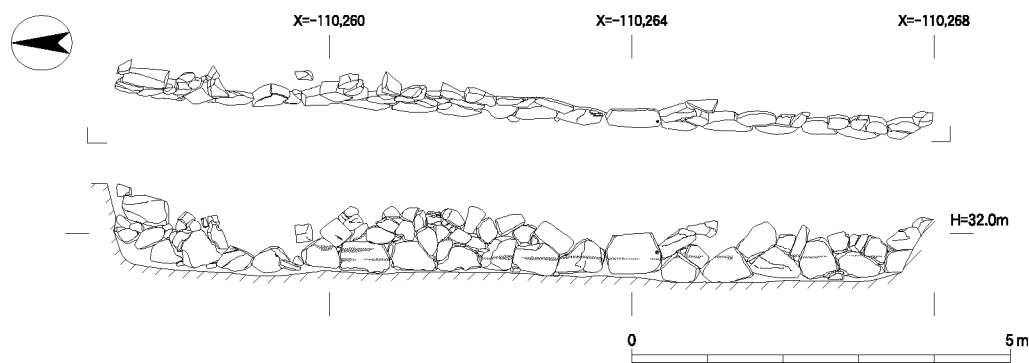


図10 西高瀬川舟入りSD70東岸護岸石垣実測図(1:100)

には長さ3.8mの丸太を護岸に横置きして補強している。北端東岸はほぼ垂直になっており、長さ3mの丸太の上面を平坦に加工し、ホゾとボルトによって3箇所を柱を立てた接岸施設を設けている。また、調査区南東部では深さ約1.2mの浅い水溜りとなっており、南北石垣が設けられている。石垣は最も遺存している場所で高さ0.9mほどで、石垣面には底から約0.3mの高さ（標高31.7m）で水面の痕跡が残っており、石垣前面の水深が浅いものであったことを示している。なお、舟入りがほぼ真北に穿たれているのに対し、この石垣は北に対して東へ約3°30'振っており、柵や建物と共通している。ただ、南壁の断面を観察すると補修による多少の前後関係はあっても、基本的には舟入りと石垣の水溜りは同時期併存しており、舟入り遺構とSB5・6・石垣遺構などが一連の遺構群であったことが推測できる。これら遺構群の廃絶時期であるが、近代整地層である黄褐色土で同時に埋め立てられており、二条駅周辺の大規模な整地で機能を停止したことがわかる。

4. 遺物

遺物は整理箱で140箱出土している。その内訳は瓦、土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器、国産施釉陶器、染付、焼締陶器、木製品、金属製品である。大半が瓦類であり、朱雀大路西側溝SD100・SD337および朱雀大路路肩整地から多く出土している。瓦類には軒平瓦、軒丸瓦、平瓦、丸瓦、鴟尾がある。土器類ではSB1とそれに付随するSD120やSX307からは9世紀中頃の土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器が出土している。朱雀大路西側溝新段階のSD100から12世紀中頃の土師器、須恵器が、旧段階のSD337からは11世紀中頃の土師器、須恵器、灰釉陶器が出土している。中世から近世の遺物はごく少量の出土で、近世の耕作溝から出土

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
奈良時代	瓦		軒平瓦1点、刻印瓦2点		
平安時代前期～中期	土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦、銭貨		土師器9点、須恵器11点、緑釉陶器2点、灰釉陶器1点、軒丸瓦1点、軒平瓦1点、銭貨1点		
平安時代後期～鎌倉時代	土師器、須恵器、瓦器、白色土器、緑釉陶器、山茶椀、輸入陶磁器、焼締陶器、瓦、銭貨		土師器42点、須恵器1点、瓦器4点、白色土器1点、緑釉陶器1点、山茶椀1点、白磁12点、青磁1点、軒丸瓦1点、軒平瓦1点、銭貨2点		
江戸時代	土師器、国産陶磁器、染付、銭貨		銭貨3点		
明治時代	陶磁器、銭貨、木製品		陶磁器35点、銭貨1点、下駄3点		
時期不明	土錘		土錘1点		
合計		140箱	135点（5箱）	8箱	127箱

している。明治時代の遺物としては西高瀬川舟入りSD70および舟入りに流れ込むSD7から多量の陶磁器が出土している。以下、おもな遺物について述べる。土器編年の型式は、小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」¹⁾に従った。

(1) 瓦類 (図11)

瓦類のほとんどは朱雀大路側溝SD100とその周辺の整地から出土している。軒平瓦・軒丸瓦・鴟尾や平瓦・丸瓦・刻印瓦などがあり平安京以前の瓦から平安時代後期の瓦まで含まれている。軒丸瓦2点・軒平瓦3点・鴟尾1点・刻印瓦2点について概略を記す。

複弁蓮華文軒丸瓦(1) 中房は平坦で界線が巡り、1+(6)の蓮子を配する。蓮弁は複弁で上下2重に配する。外区は2本の圈線内にやや密に珠文を配する。外縁は平坦である。瓦当部成形は接合式。瓦当下半横ケズリ、裏面には指痕が明瞭に残る。胎土は砂粒を含むが緻密、焼成硬質。平安時代中期。山城森ヶ東窯産。「木村」226と同範。SD100出土。

単弁蓮華文軒丸瓦(2) 中房は凸形で、1+(4)の蓮子を配する。単弁16弁で、弁端にしをぎを有する。間弁は三角形で連続する。外区は2本の圈線内に珠文を密に配する。瓦当部成形は接合式で、裏面には丸瓦を貼り付けた接合痕が残る。胎土は細粒、焼成は軟質。表面は灰黒色、内部は灰白色を呈する。平安時代後期。丹波産。SD100出土。

唐草文軒平瓦(3) 唐草文は5回反転で、主葉は大きく反転し、先端は丸くなる。外区には珠文がやや粗く巡る。曲線顎。胎土精良。焼成はやや軟質。表面は灰褐色、内部は煉瓦色を呈する。

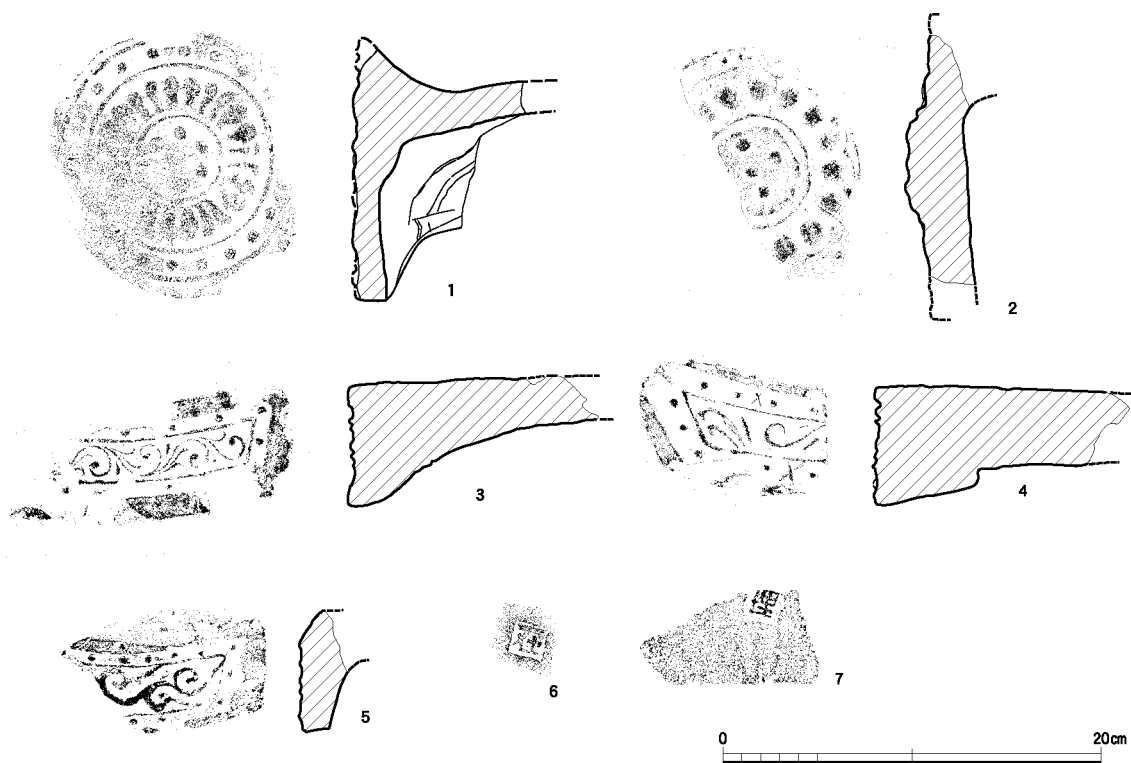


図11 軒瓦拓影・実測図、刻印瓦拓影(1:4)

平安時代中期。仁和寺円堂院79aと同型式。SD100上層出土。

唐草文軒平瓦（４） 平城宮6710-A型式瓦である。唐草文は3回反転で、界線の外側に珠文帯を設け上外区と脇区を突線で分ける。珠文の間には一部に「×」文様を配する。顎は幅広の段顎。胎土は精良、焼成はやや軟質。表面は灰黒色、内部は灰白色を呈する。奈良時代。SD7出土。

唐草文軒平瓦（５） 唐草文は外側から中央へ4回反転する。主葉は大きく反転し、支葉の先端が界線に接する。外区には小振りの珠文を配する。瓦当部成形は半折り曲げ。瓦当上端横ケズリ。砂粒多く含み、灰色、硬質。平安時代後期。山城産。SD221出土。

『在』銘刻印瓦（６） 丸瓦凸面に刻印する。硬質で灰色。SD100出土。

『理』銘刻印瓦（７） 平瓦凸面に刻印する。やや軟質。黄灰色を呈する。近世小溝群出土。

鴟尾はSD100から1点出土している。小片のため部位の特定はしがたい。胎土緻密。焼成硬質。外面に自然釉が付着する。

（２）土器類

出土した土器類には平安時代前期や平安時代末期から鎌倉時代の土器類、近世末期から明治時代の陶磁器類がある。全体に出土量は非常に少ないが、平安時代末期の遺物が比較的まとまっている。

１）平安時代前期の土器

平安時代前期の遺物は建物SB1、それに付随する溝SD120、石敷き遺構SX307や姉小路側溝SD9の下層から平安時代後期の遺物と共に出土しているが、いずれも少量である。その他朱雀大路側溝の作り替えに伴う整地からも、わずかに出土している。

SB1出土遺物（図12）

SB1から出土の土器類は土師器と須恵器がある。総破片数101片あり、その内容は土師器

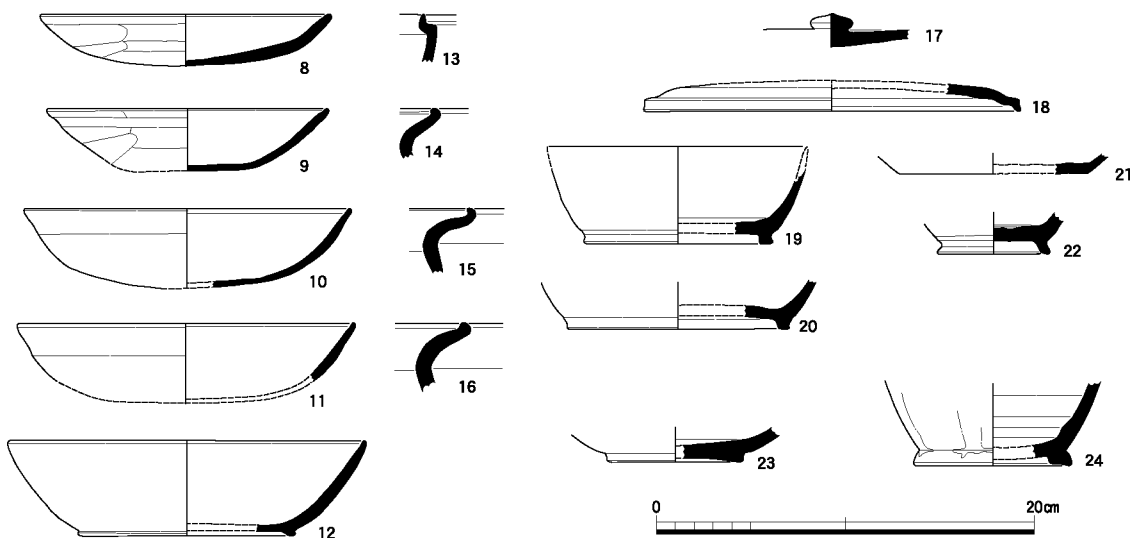


図12 SB1・SD120・SX307出土土器実測図（1：4）

95.0%、須恵器5.0%である。機能別に見ると供膳具76.2%、貯蔵具2.0%、煮沸具17.8%、その他4.0%、と供膳具が多い。9世紀前半（平安京 期新）の資料である。時期的に同じSD120、SX307出土土器を一括して図示した。

土師器 杯A（10・11） 口径17.4～18.0cm、高さ4.3cm、外面の調整は磨滅が激しく観察できないが、ヘラケズリと思える。

壺（13） 口縁部の破片である。口径不明、器表は磨滅しているが外面にミガキがみとめられる。

甕（14） 端部の肥厚した口縁部の破片である。口径不明。

須恵器 杯B（19） 口縁部を欠いている。底径10.0cm。焼成やや軟質。

SD120出土土器（図12）

SD120の土器類は182片あり、その内容は土師器96.2%、須恵器3.8%である。機能別に見ると供膳具95.1%、貯蔵具1.6%、煮沸具2.7%、その他0.5%である。SB 1 出土土器と時期的に差異がなく、この溝はSB 1 に付随する遺構であると考えられる。

土師器 皿A（8） 口径15.5cm、器高2.8cm、外面の調整はヘラケズリによる。

杯A（9） 口径15.0cm、器高3.4cm、外面の調整はヘラケズリによる。口縁端部を小さくつまみ上げている

SX307出土土器（図12）

SX307の土器類は150片あり、その内容は土師器82.0%、須恵器15.3%、緑釉陶器2.0%、灰釉陶器0.7%である。機能別に見ると供膳具81.3%、貯蔵具3.3%、煮沸具6.7%、その他8.7%である。

土師器 杯B（12） 口径19.0cm、器高5.1cm、底径11.6cm。外面ヘラケズリ、器表が荒れているためミガキの有無は不明。

甕（15・16） いずれも小片のため口径不明。15は口縁端部のつまみあげが大きく、内側に抱え込むように屈曲する。

須恵器 杯蓋（17・18） 17は天井部のつまみ部分である。胎土緻密、焼成硬質。18は口縁端部の破片である。小片のため口径にはやや不安を残す。胎土密、焼成硬質。

杯B（20） 底径11.8cm、高台貼り付け痕を明瞭に残す。胎土密、焼成硬質。明青灰色。

杯A（21） 底径9.7cm、底部ヘラオコシ。胎土緻密、焼成良好。

壺（22） 底径6.0cm、胎土密、焼成硬質。暗青灰色を呈する。

緑釉陶器 椀（23） 底部は削り出しによる円盤状高台、底径7.2cm。外面底部以外をミガキ、高台底部にはひと刷毛のみ施釉し露胎部分を残す、他の部分は全面に薄く刷毛塗り施釉。灰黄色を呈する。京都産。

灰釉陶器 壺（24） 底径8.4cm、幅広の輪高台が付く。外面は透明オリーブ色の灰釉が流下する。東海産。

SD 9 出土土器（図13）

姉小路南側溝にあたるSD 9からは平安時代末期から鎌倉時代の遺物が多く出土しているが、わずかながら平安時代前期の遺物が出土している。溝埋土の堆積には2時期の明確な区別は無く、

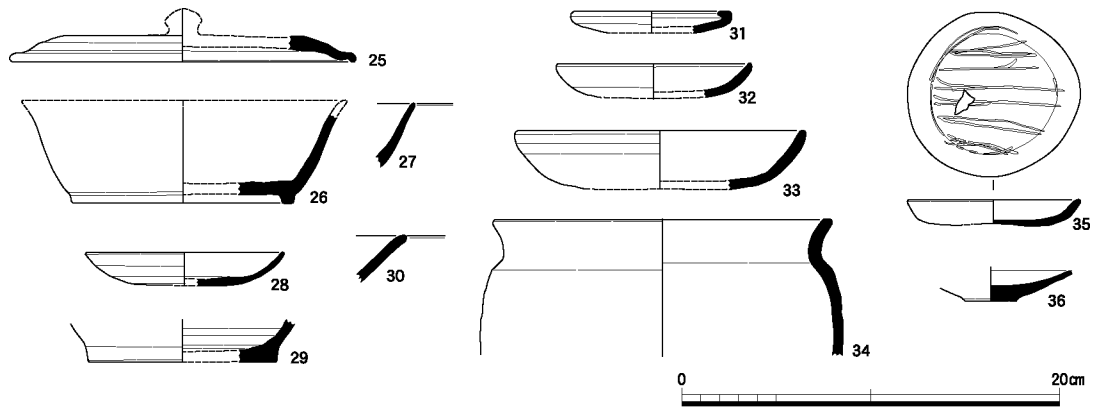


図13 SD9出土土器実測図(1:4)

混入品とも考えられるが、この時期をあらわす資料として図示する。

須恵器 杯蓋(25) 口径18.4cm、口縁部の破片である。天井部はヘラオコシ、胎土細粒、焼成硬質。灰白色。

杯B(26) 底径11.6cm、口縁端部を欠く。底部はヘラオコシのち高台を貼り付け。胎土密、焼成硬質、灰色。

杯(27) 口縁部の破片、底部の形態は不明。暗青灰色、白色粒を含む。

皿(28) 口径10.6cm、器高1.8cm、類例の少ない形態の皿である。底部外面は回転ケズリ、他の部位はナデ。灯明皿として使用されたようで内面は黒色、口縁端部には煤が付着する。胎土密、焼成硬質、断面暗青灰色。

鉢(29) 底径10.0cm、底部糸切り、胎土密、焼成硬質。小片である。

緑釉陶器 椀(30) 口縁部の小片である。口径不明。内外面をミガキ後刷毛塗り施釉、淡黄緑色、焼成軟質。京都産。

2) 平安時代後期の土器

平安時代後期の遺物は朱雀大路西側溝旧段階のSD337から出土している。11世紀中頃(平安京期中)に該当する時期の出土遺物は、この遺構からのものだけである。出土量が非常に少なく、破片計数による統計は省いた。

SD337出土土器(図14)

土師器 皿A(37~39) 小片のため法量に若干不安があるが、口径10.0~11.0cm、器高1.3cm。口縁端部は屈曲させたのち上方に突起させる、器壁はやや厚い。

緑釉陶器 椀(40) 高台径8.0cm。高台下端面が凹線条に窪む貼り付けの輪高台。素地は須恵質暗青灰色、釉は比較的薄く全面に刷毛塗り施釉される。近江産。

白磁 椀(41) 折り返された口縁端部の小片である

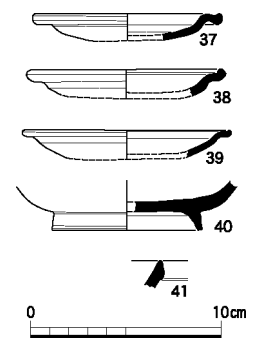


図14 SD337出土土器実測図(1:4)

3) 平安時代末期から鎌倉時代の土器

平安時代末期から鎌倉時代の土器はSD100・SD9・SD221などから出土している。SD100からはまとまりを持った土器群が出土した。

SD100出土土器（図15）

出土した土器類は総破片数1,536片あり、その内容は土師器93.9%、白色土器0.4%、須恵器・山茶椀2.5%、瓦器1.6%、輸入陶磁器0.8%、焼締陶器0.6%、その他0.1%である。機能別に見ると供膳具95.1%、貯蔵具1.4%、煮沸具1.6%、その他2.9%と椀皿などの食器類が大半を占めている。12世紀後半（平安京 期新）に属する。

土師器 皿Ac（52～56） 口縁部を内側に折り曲げたコースター形の皿である。52～55は口径8.4～9.8cm、器高1.0～1.3cm。56は口径11.0cm、器高0.8cmと大小二つのタイプがある。

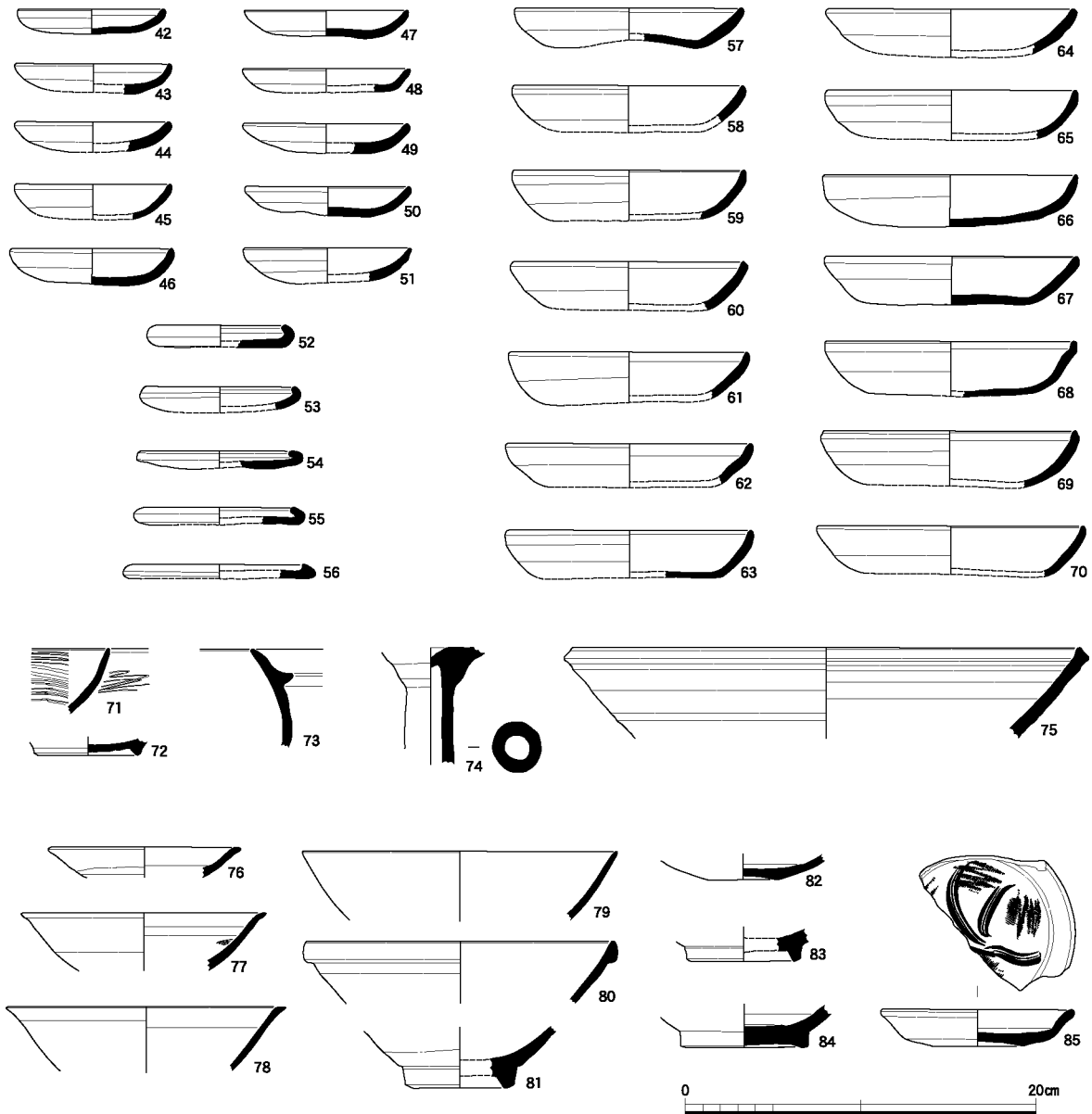


図15 SD100出土土器実測図（1：4）

皿Nは口径8.5～9.6cm、器高1.4～2.1cmの小型のもの（42～51）と、口径13.2～15.4cm、器高2.3～3.3cmの大型のもの（57～70）に分かれる。いずれも口縁部はナデ、体部はオサエ。

瓦器 椀（71・72） 71は小片のため口径不明。内外面にミガキがみとめられる。72は底径6.0cm、貼り付け高台の底部。磨滅激しくミガキは不明。

三足付き羽釜（73） 口径不明。内面に粗いミガキが認められる。

白色土器 高杯（74） 杯部と軸部接合部分の破片。軸部の面取りは不明瞭。

須恵器 鉢（75） 口径30cm。直線的に大きく広がり口縁に端面を持つ。

輸入陶磁器 輸入陶磁器には白磁と青磁があるが、白磁11片、青磁2片と白磁がその大部分を占める。

白磁 皿（76・82） 76は外反する口縁部。82は無高台の底部、底部はケズリ、露胎である。内面立ち上がり部分に沈線が巡る。

白磁 椀（77～81・83・84） 77は口縁部が外反し、体部内面には櫛描き文様が認められる。78は外反する口縁端部の内傾する端面を持ち、下半に浅い沈線を持つ。79は直線的に広がる口縁部、外面の釉にピンホールが目立つ。80は折り返され肥厚した口縁を持つ。81・83はケズリ出し高台の底部、内面底部の釉を輪状に掻き取る。84は同じくケズリだし高台の底部だが高台内面のケズリが浅く胎土のがさつきがみられる、内面に釉の掻き取りは無く上方に沈線が巡る。

青磁 皿（85） 底部は無高台の皿、内面底部にヘラ描きによる草花文と櫛描き文を施す。外面ケズリは口縁端部直下まで及ぶ。底部は全面施釉後掻き取り、生乾きの状態で行われたようでケズリは胎土にまで及ぶ。胎土灰色、釉は透明なオリーブ色。同安窯産

SD9出土土器（図13）

SD9からは平安時代前期の遺物も出土しているが、この時期の土器は156片出土している。その内容は土師器92.9%、白色土器0.6%、瓦器3.2%、輸入陶磁器1.9%、焼締陶器1.3%である。12世紀後半（平安京 期新）に属する。

土師器 皿Ac（31） 口径8.6cm、器高1.2cm、口縁部を内側に折り畳むコースター形の皿。

皿N（32・33） 32は口径10.4cm、器高1.9cm、33は口径15.5cm、器高3.2cmの大型のもの。

甕（34） 口径18.0cm、小片である。

瓦器 皿（35） 口径9.2cm、器高1.4cm。内面底部には粗いミガキが施される。

白磁 皿（36） 底径2.8cm、外面底部のみケズリ、他の部位はロク口の水挽きのままである。

SD221出土土器（図16）

SD221からは38片の土器が出土している。その大部分が土師器の小片で、わずかに山茶椀と輸入陶磁器が出土している。時期はSD100より若干新しく、12世紀末期から13世紀初頭（平安京 期古）に属する。

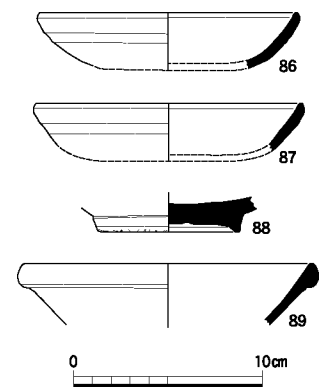


図16 SD221出土土器
実測図（1：4）

土師器 皿N (86・87) 口径14.0cm・14.4cm、器高不明。2段ナデの口縁部。

山茶碗 (88) 底径7.6cm、糸切りのち貼り付け高台、端部に初殻痕が残る。内面は重ね焼きから外れる部分に自然降灰が認められる。

白磁 椀 (89) 口径16.0cm、折り返され肥厚した口縁部の破片。

4) 明治時代の土器 (図17)

今回の調査では明治時代に作られた西高瀬川舟入りが確認された。舟入りに流れ込む流路や舟

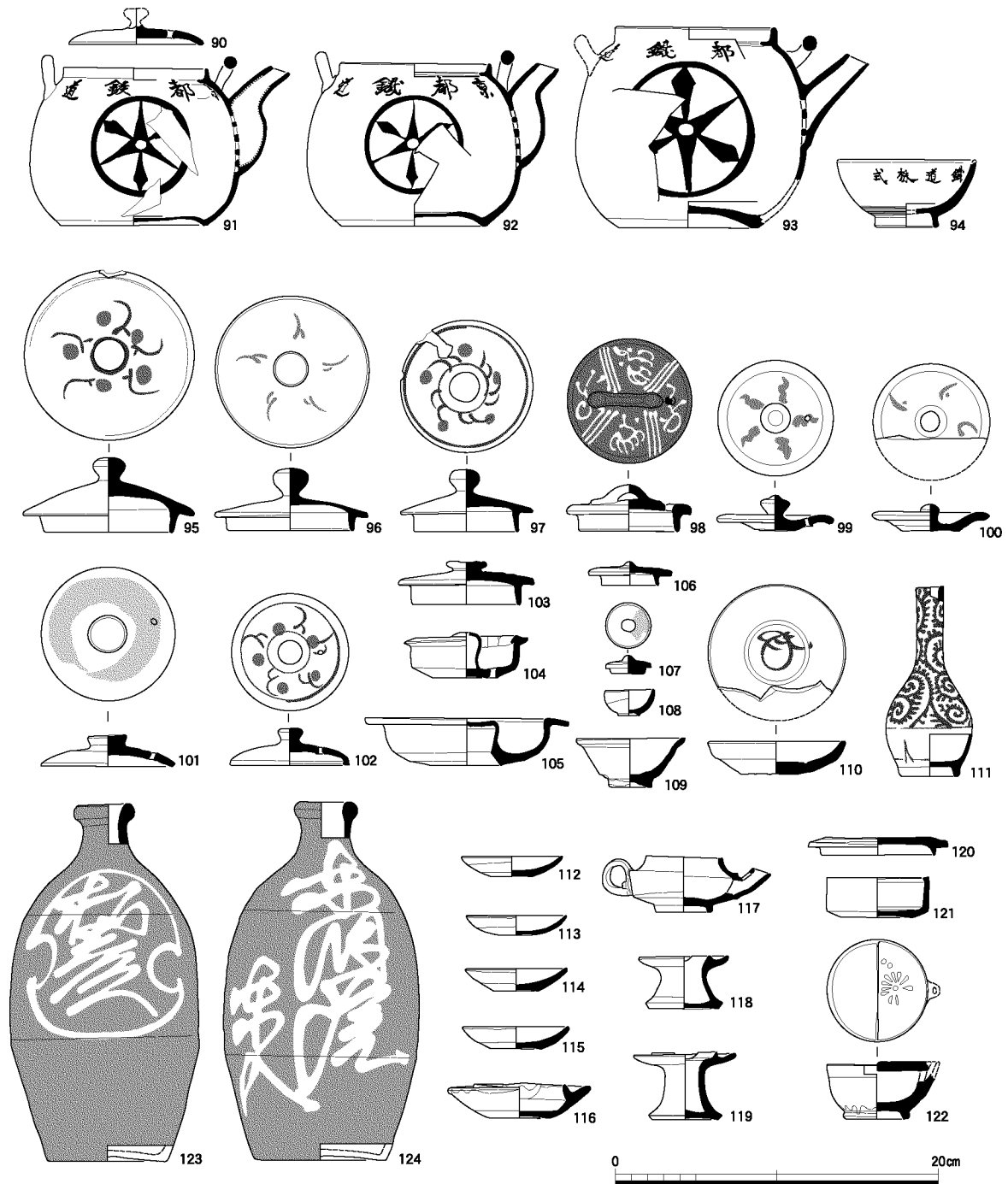


図17 SD7・SD70出土土器実測図 (1:4)

入り本体から当時の遺物が多量に出土している。産業遺構としての重要性と時期も特定されることから、いくつかの遺物を取り扱う。

SD7・SD70出土土器（図17）

土瓶・蓋・湯呑み（90～109） 90～94は揃いの土瓶・蓋・湯呑みである。90は口径8.4cm、91・92はほぼ同寸で口径8.8～9.2cm、器高9.8～10.0cm、底径8.9～9.1cm。93はやや大振りで口径9.9cm、器高12.5cm、底径8.7cmである。94は口径8.6cm、器高4.3cm、底径4.0cmの湯呑み。ともに外面は白化粧を施し透明釉を掛け、クリーム色を呈する、いずれも薄く作られている。94以外は内面オリブ色の発色。土瓶の外面には上部に「京都鉄道株式会社」と描かれ、体部中央の相対する2方に、明治24年に制定された京都市の徽章が描かれている。94は外面に「京都鉄道株式会社」、見込みに京都市の徽章が描かれている。この遺物は京都鉄道が明治41年に国有化された時に廃棄されたものと考えられる。95～106は外径5.1～12.7cmの蓋、化粧掛けや鉄絵、刷毛目、イッチン、つまみや落としの形などに様々な意匠が見られる。95・97・102は上面化粧掛け後掻き落としとして放射状の文様をあらわし、各線間に緑釉を散らす。胎土は赤土、95内面に墨がべったりと付着する。96・99は化粧掛けの上から呉須絵。101・103・104・105は刷毛目。98は上面緑釉の上にイッチンで文様を描く。106は上面に灰色を帯びた灰釉を掛ける。107は小さな蓋、土灰釉の上に白土と緑釉を垂らす。釉は溶けず失透する。108はミニチュアの椀、緑釉、軟質。109はぐい呑み、刷毛目の上に鉄絵あり。

110は内面に低下度釉を掛けた土師器皿、見込みには宝珠文が描かれる。111は染付花入れ、いわゆるタコ唐草が描かれる。112～116・118・119は燈火器、112～115は灯明皿、内面のみ透明釉。116・118・119は皿受け、底部以外に透明釉。117は油差しである。120は蓋、121は重ねものの鉢。122は水滴、ワラ灰の多い釉を掛けている。123・124はいわゆる貧乏徳利。鉄を塗った上にイッチンで屋号と地名が記されている。

（3）金属製品（図18）

金属製品では銭貨が出土している。

銭貨は西高瀬川舟入りや近世小溝群、朱雀大路側溝周辺の整地層などから計8枚出土している。内訳は明治9年発行の一銭銅貨が1枚（131）、江戸時代のもものでは「寛永通寶」3枚（128・129）、1枚は保存状態が悪く図示していない。「文久永寶」1枚（130）北宋銭では「咸平元寶」1枚（126）、「熙寧元寶」1枚（127）が、他に腐食が激しく特定は困難だが、大きさや金属の質などから皇朝十二銭の一つである「乾元大寶」と思えるものが1点（125）出土している。

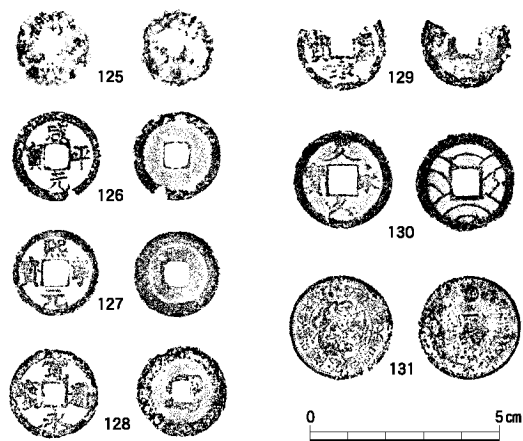
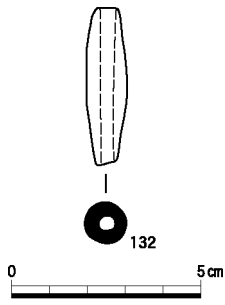


図18 銭貨拓影（1：2）



(4) 土製品 (図19)

土製品は近世耕作溝から土錘が1点(132)出土している。長さ4.2cm、径1.1cm、孔径0.3cm。胎土細粒。時代による形の変化が小さいもので、時期の特定はできない。

(5) 木製品 (図20)

図19 土錘実測図
(1 : 2)

木製品はおもに西高瀬川舟入りSD70から出土した。明治時代の下駄(133~135)や護岸の部材などがほとんどで、近世以前のものでは棟門の柱穴から礎板が出土している。

註

- 1) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年

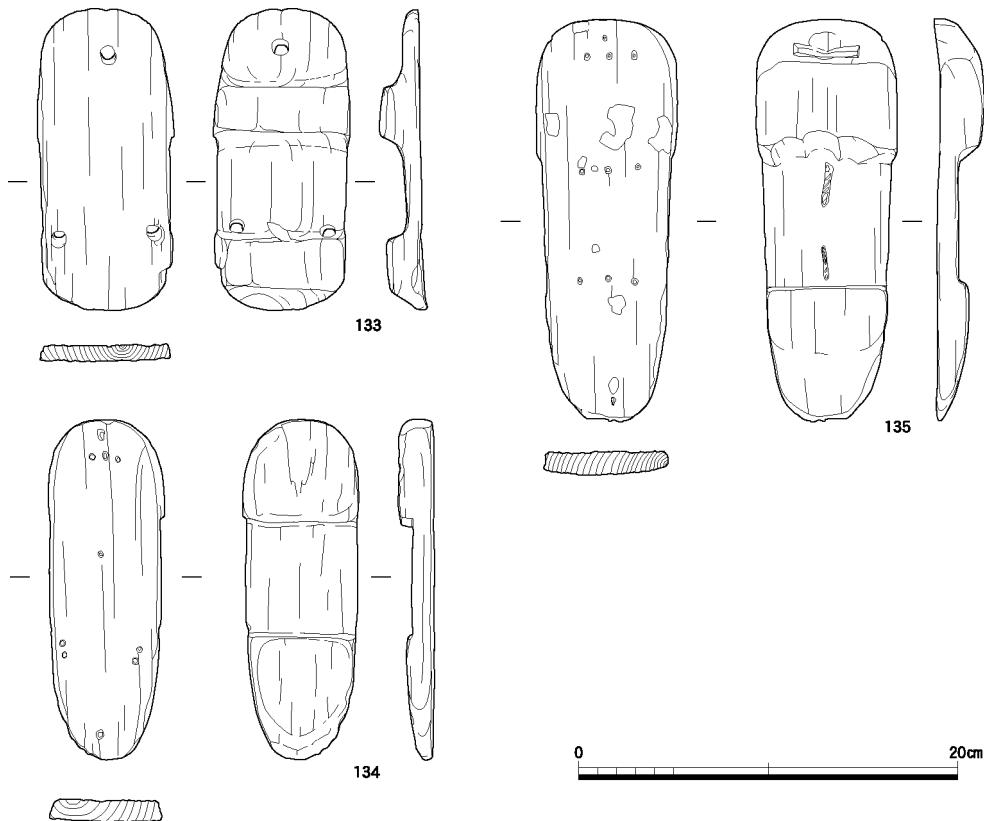


図20 SD70出土下駄実測図 (1 : 4)

5.まとめ

今回の調査成果は大きく見て、平安時代では朱雀大路および姉小路に関する条坊遺構を確認するとともに不明瞭ながら四町内の宅地利用の様相を復元するためのデータを得ることができたことであり、明治時代では西高瀬川に関連する舟入り遺構を発見したことである。これらの調査成果についてまとめておきたい。

平安時代の遺構は、条坊遺構として朱雀大路西側溝を長さ78mにわたって検出した。平成4年度の試掘調査成果を合わせると確認した総長は約108mとなり、右京三条一坊四町の東辺側溝をほぼ全域にわたって確認したことになる。朱雀大路西側溝は2時期あり、東側の旧段階側溝(SD337)は成立時期が確定できないが、今回の調査で11世紀ころに補修を受けていることが判明した。『延喜式』左右京職京程条によると、朱雀大路西築地心から側溝肩口まで1丈8尺(約5.4m)と記載されているが、SD337の西肩から推定築地心まで5.7mほどであり『延喜式』の記載とよく合致する。おそらく、平安京造営当初の西側溝は旧段階側溝と同一位置に掘削されており、補修を重ねて最終的に11世紀に埋没したものと考えられる。その後、12世紀に当地域周辺の条坊が再整備された段階で、新段階側溝(SD100)が西寄りに掘削されたのであろう。また、姉小路南側溝もこの時に掘削されたと考えられるが、朱雀大路西側溝と合流せず途切れている。北側溝も合流していないことが平成8年度の調査で判明しており¹⁾、朱雀大路に排水するのを避けて西側へ排水するシステムが堅持されたことを示している。

四町宅地内の様相であるが、先述したように当町は「西三条第」の有力想定地となっているが、石敷き遺構SX307が園池に関わる遺構である可能性が指摘できるのみで、「西三条第」に関わる明確な遺構は検出できなかった。「西三条第」は別名「百花亭」とも称され、清和天皇が観桜を行ったことでも知られるように非常に優美な庭園があったことが推測できる。しかし、四町域の調査では平成5年度の調査で検出した園池遺構が唯一のものであり²⁾、名邸に相応しい広大な園池が存在した形跡も現状では確認できない。また、大型掘立柱建物など大規模邸宅の存在を示唆するような遺構も発見できていない。当地周辺は遺構面が激しく削平を受けており、遺構が残っていない可能性もあるが、考古学的に「西三条第」の所在地として妥当かどうかは保留せざるを得ないのが現状である。今後の調査の進展によって検討していく必要がある。

次に、近代の遺構として西高瀬川の舟入り遺構が確認されたことは大きな成果である。西高瀬川は幕末から明治初年にかけて舟運を目的に掘削された運河で、嵯峨野と京中(壬生・千本三条・二条城)そして吉祥院・淀を連結し、前者のルートは丹波・丹後からの材木・薪炭を、後者のルートは淀川からの諸物資を京中に搬入する重要な幹線水運として機能していた³⁾。最初に掘削されたのは文久2年(1862)で、慶応4年(1868)の「京町御絵図細見大成」によれば千本四条の位置に「西高瀬舟入」が記載されている⁴⁾。その後、明治2年(1869)には京都府の水路改良計画により四条通に沿っていた流路を三条通に付け替えており、明治17年(1884)には嵯峨野から筏によって材木を運び込むことが許可され、以降千本三条周辺は材木商が立ち並ぶ材木町として

発展していくことになる。今回検出した舟入り遺構は、まさに明治17年の許可を受けて筏流して材木を搬入した集木場の遺構であり、石垣を伴う施設の存在など当時の物資流通の活発な様子を窺い知ることができよう。

しかし、このように隆盛を極めた西高瀬川の水運も明治32年（1899）の京都鉄道の開通によって次第に衰退していく。明治35年（1902）の京都市実地測量地図には千本通を南流する西高瀬川を引き込んだ舟入りが描かれているが、大正4年（1915）の「大典記念京都市街地図」には舟入りは認められず、舟入りの終焉については古地図の記載から明治35年から大正4年の間と推定できる。舟入りは近代の整地土で一括して埋め立てられているが、その時期については舟入りに流れ込むSD7から出土した「京都鉄道株式会社」関係の遺物が有力な資料であろう。京都鉄道は京都と山陰地域を直結する重要な路線として私設された鉄道で、明治26年（1893）に「京都鉄道株式会社」が設立され明治32年に京都 - 園部間が全線開通したものである。当初は重要な軍港が所在する舞鶴まで敷設し、丹後地域との物資流通を促進させて京都の産業を振興することが目的であったが、結局創業から10年あまりで経営は破綻し、明治41年（1908）に国有化⁵⁾されている。今回出土した「京都鉄道株式会社」関係遺物は、京都鉄道が国有化されたときに廃棄された一括資料と考えられ、二条駅周辺の整地が明治41年前後に行われたことを示している。三条舟入りの終焉は、皮肉にもその衰退をもたらした京都鉄道の国有化と機を一にしていたと想定できるのである。

西高瀬川の掘削、そして京都鉄道の開通という、京都の近代化を考えるうえで非常に重要な遺構が今回の調査で明らかとなった。今後は産業考古学の視点からこれら近代の遺構にも焦点をあてて調査を行い、京都の近代化の様相を考古学的に明らかにしていく必要がある。

註

- 1) 高橋 潔「平安京右京三条一坊」『平成8年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1998年
- 2) 伊藤 潔「平安京右京三条一坊2」『平成5年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 3) 森谷尅久・山田光二『京の河』角川書店 1980年
- 4) 以降、幕末から大正の京都市街図については以下の文献に所載された古地図による。
『慶長・昭和京都地図集成 1611（慶長16）年 - 1940（昭和15）年』柏書房 1994年
- 5) 老川慶喜「わが国における全国的鉄道体系形成過程の特質 - 京都鉄道の建設をめぐる政府と企業の動向 - 」『社会経済史学』43 - 6 1978年

圖 版

報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょううきょうさんじょういちぼうよんちょうあと							
書名	平安京右京三条一坊四町跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報							
シリーズ番号	2004-16							
編著者名	網伸也・山口 眞							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2005年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょううきょう 平安京右京 さんじょういちぼう 三条一坊 よんちょうあと 四町跡	きょうとしなかぎょうく 京都市中京区 にしきょうとがのおちょう 西ノ京梅尾町	26100		35度 00分 22秒	135度 44分 42秒	2004年7月 27日～2004 年12月28日	3,791m ²	大学院 新築工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
平安京右京 三条一坊 四町跡	都城跡	平安時代前期 ～後期	朱雀大路西側溝、 建物、溝、石敷き 遺構	土師器、須恵器、緑釉 陶器、灰釉陶器、瓦、 銭貨				
		平安時代末期 ～鎌倉時代	朱雀大路西側溝、 姉小路南側溝、棟 門、溝、石敷き流 路状遺構	土師器、瓦器、白色土 器、須恵器、山茶碗、 輸入陶磁器、焼締陶器、 銭貨				
		江戸時代 ～明治時代	柵列、建物、流路、 西高瀬川舟入り	土師器、国産陶磁器、 染付、銭貨、木製品				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2004-16

平安京右京三条一坊四町跡

発行日 2005年3月31日

編集発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 075-256-0961